



右：ひらいゆう《赤い靴》油絵、キャンバス、41x33cm、2023
上：井上明彦《水のゆくえ》ブルキナファソの土顔料、膠、紙、257x182mm、2012



上：ひらいゆう《石けりあそび》油絵、キャンバス、46x55cm、2023
下：井上明彦《水のゆくえ》アクリル、木ほか、240x302mm、2021

井上明彦 Akihiko Inoue

1990年代半ばより、水、重力、地面、屋根など、人間の生存を基礎づけるものに対して、絵や立体、写真、インスタレーションなど多様な方法で関わる。1995～2021年京都市立芸術大学美術学部教員（造形計画）。2006～07年文化庁新進芸術家在外研修（パリ）。近年の個展に、「2と5、偶々」（ギャラリーマロニエ、京都、2023）、「二つの傾斜地で：空堀と竜ヶ迫」（+1art、大阪、2022）、コラボレーションに、「発酵をよむ—藤枝守・井上明彦・稻垣智子」（+1art、2019）、「複数形の世界のはじまりに」（東京都美術館、2018）、「新シク開イタ地」（神戸アートビレッジセンター、2016）など



「水たまり」という言葉からどんなイメージが浮かぶでしょう？最初に浮かぶのは地面の窪みにたまつた雨水でしょうか？窪みのスケールによって、それは池となり湖、そして海になる？宇宙から眺めたら海は大きな水たまりに見えるかもしれません。地面の小さな窪みにたまつた水も地球の2/3を覆う海も、スケールは違うけれど、どちらも重力に関係しています。ふだん意識しない重力の存在を水たまりは見せてくれます。ふだん意識しない（見えていない）ものを見せてくれるという意味では、アートも水たまりと同じようなものかもしれません。+1 art カワラギ

水たまり

ひらいゆう・井上明彦

Mizutamari

Yu Hrai, Akihiko Inoue

3/27(水) - 4/13(土)

12:00 - 19:00 (最終日～17:00)

休廊 日・月・火

